

---

# 想い出を生きよう

蒼凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

想い出を生きよつ

### 【著者名】

Z50761

### 【作者名】

蒼風

### 【あらすじ】

事故で記憶を失いながらも、そんなことあまり気にせずに生きてる少年と。

心配してるけど、どちらも同じだし別にいつかって思つて見守る少女の話。

「ねえ、明日、暇?」

「あ?ああ、別に予定ねえけど」

「じゃあ、明日、私に会いに来てみたまえ!」

「やだ

「なんですよー?」

「だるーか

「それだけかい!」

「充分だろ?が

「まつたく・・・ダメダメ、そんなことしたら・・・ひつ・

「・・・おまえってわあ、俺の弱点、わかってるよな・

「え?」

「・・・なんでもねえよ・・・何時だ?」

「・・・え?」

「だから、何時に待ち合わせだ??」

「・・・・えっと・・・・お皿を回りついで食べたいから・・・・・・

10時頃かな

「わかった。んじゃ、いつもの場所でいいな?」

「うん・・・・冬同・・・・

「あ?」

「ありがと!」

「ばっか、なにいってんだよ・・・・・・じゅあ、またな

「うん・・・・おやすみなさい!」

「ああ、ねやすみ

「遅い・・・・・・

汗で湿った時計をわずらわしく想いながら、俺はぽつりと呟いた。  
文句を言しながらも、再び腕に視線を落とす。

アナログの針は十時半を示している。

待ち合わせは十時だったはずだ・・・・・・やつ、つまり俺は・・・

。

「待たされてる・・・ってわけだ

誰にともなく呴く言葉。

その言葉が改めて意識させたらしく、俺の眉がへの字に曲がつてゆく。

「…………あのバカ、自分から言ひだしたつていつのこ、なんで待たせるんだよ……」

俺は目を閉じると、深い深いため息をついた。

駅に必ずといつていいほどおかれている、意味のよく分からない銅像。

飛翔やら希望やら、やけに抽象的な名前が付けられているだけでなく、「お前の希望は、う　かい！」つていうつっこみを思わずいれたくなるような銅像は、ほとんどの場合待ち合わせ場所となる。

それは同時に、その周辺の人口密度を異常なほどあげる結果となるわけだ。

芋を洗うかのようにわらわらと集まっている人々を横目で見ながら、俺は何本目か分からなかったばこに火を付けた。

以前からひねくれ者だったらしく、待ち合わせするときは人と違う場所にしてしまう。

今俺がいる場所も、待ち合わせ場所として定番のオブジェから50メートルほど離れた場所だった。

周りには目印になるようなのはなにもない。だが、別にかまわなかつた。

俺とあいつが知つていれば、それで充分なんだから。

煙草の灰が挟んだ指の近くまでやつてきたので、ポケットから携帯用灰皿を取り出して中に入れる。

ささくれだつた心を落ち着かせるように大きく深呼吸した俺の視界のすみに、見慣れた黄色いワンピースが揺れた。

「「ひめ～ん、まつた？」

「『めんじゃねえだろ……もう、30分だぞ？お前から誘つたって言つのに……んで、理由は？」

「う……女の子に遅れた理由を聞くなんて、野暮つてものよ

「あ……寝坊だな？」

「……う」

「まあ、いつものことだから、別に気にしてね～よ

「ほんと？ よかつた？」

「ああ、晩飯、松竹庵の焼き肉でいいぞ」

「…………鬼」

「はつ、聞こえんなあ」

「…………それでいいです……」

「よろしい」

俺は笑いながら歩き出した。

その後ろでは、今晚の出費を思つて足取りも暗く……まるで世界の終わりを自分一人だけが知らされたかのような落ち込みようで、女が歩いてる。少し気の毒になつた俺は、後ろを振り返るとそいつの頭を軽く小突いた。

「おら、くれ～ぞ。仕方ねえから、晩飯はおじつてやるわ」  
年に一度の確率でしか発動しない、最終兵器「優しい言葉」で胸を射抜かれた女は、子犬のような目で俺を見上げた。

「…………ちょっとかわいいかもしんない。

「…………冬司？ 冬司つてば～」

「お？ ど、どうした？？」

破壊力抜群の微笑みで陥落していた俺の意識を、女が振り起こす。

（あ、危なかつたかも……）

「どうしたつて、こっちのセリフでしょ？ 大丈夫？？」

「ああ、大丈夫だよ。じゃあ、沙智、そろそろ行こうぜ」

「うん」

俺の呼びかけが、沙智の微笑みを生んだ。

二ヶ月前、事故にあった。

梅雨なのに、間違つて夏が来てしまったかのような晴れの日。久しぶりに吹いた心地よい風に誘われ、俺はバイクに命を吹き込んだ。

お気に入りのコース。

ゆったりと走り、海を眺め、土産をつんで帰つてくれる。

そんな当たり前な、でも俺にとつては大切な時間。

夕日に後押しされながら走つていたとき、不意に時間が止まつた。

俺の目の前に小さな何かが飛び出してきた。

目を見開く。瞳の中に、恐怖に顔を歪ませて硬直する男の子が飛び込む。

そして俺は・・・その子を避けるためにアスファルトに向かつてダイビングした・・・らしい。

そう、「らしい」のだ。

病院で目覚めたとき、俺の頭の中は見事なくらい真っ白だつた。なんもなかつた。

からつぽだつた。

異常とも言える事態に、俺は呆然ともしなかつた。笑うしかなかつた。

笑いながら涙が出た。

そのとき・・・大きな瞳に涙を一杯にたたえながら抱きしめてくれたのが・・・沙智だつたんだ。

俺の恋人なんだそうだ。

これっぽっちも記憶の残つていない俺には、はつきり言つて実感が湧かない。

好きだつて気持ち、愛しいつて想いも、なんにも浮かんではこなかつた。

だけど・・・暖かかつたつてことだけは・・・覚えてる。

んで、俺は人生をやり直す羽目になつちましたんだが、幸いにも

俺の失ったものは「思い出」って奴だけだったので、日常生活にはなんの支障もなかつた。

思いつきりご都合主義である。

だけど、この世界の神様（作者？）がせっかくそういうことにしてくれたんで、素直に甘えておこう。

もとをただせば、事故にあつたのも記憶喪失になったのも、バカ神のせいだが、文句を言つてはきりがない。

人生あきらめも肝心だつて悟つた、21歳の大学生であった。あ、それともう一つ、忘れちゃいけない事故による副作用がある。人格が変わつたんだ。

昔は少し大人し目の、穏やかな性格だつたんだが、記憶を失つてからは180度かわつちまつた。明るくなつたんだ。

沙智に言わせると、「墮落した」つてことになるらしいんだが・・・まあ、笑いながら言つてたんで冗談だろう。うん、冗談つてことにしておこう。とりあえず、どんなに変わろうが俺が冬司つてことには変わりないんで、そんなに大した問題ぢやない。

「んで、なうん俺はこんな所を息を切らせて登らなきゃいけないのかな、沙智さん？」

「え？・・・なんか言つた？」

俺の五十歩ほど先を歩く沙智の声が、微かに届いた。

「・・・なんでもねえよ」

いろんなあきらめが胸の中をよぎり、言葉が出なくなる。今登つてているのは、山だつた。

丘でも、平原でも、ましてかわいいね～ちゃんがいる海であるわけもなく、山。

富士山やハケ岳レベルじゃなくても、素人には少しきつい高さを持つている場所を、なんで俺が登らなくてはいけないのか。

すでに一時間ほど歩いている俺は、そんな基本的な疑問も気にならなくなつてゐるほど疲れ果てていた。

遅れてきたあいつと合流した後、約束通り昼飯をおじり、町中を少しふらついて、駅に戻ってきたのが一時半。

んで、駅のトイレに行き、待ち合わせた改札に向かうと……フル装備を地面においてにこにこしている沙智が待っていた。

・・・・・ 説明を受けるまでもなく、彼女がやろうとしていることを察してしまった俺は、全速力で逃げ出そうとしたが、平氣な顔で追いついたあいつに肘の関節を極められ、痛みで声も出ない状態であるずると引きずられていったのは余談である。

### 化け物め

「ん～？ 冬司～？」

声に反応して顔を上げると、にこにこと微笑む沙智との距離が五メートルほどに縮まっていた。

その笑みの額の部分には、血管が浮き出ている。はつきりといって・・・怖い。

人の思考の中の、しかも消え入るほど小さな咳きに反応できる沙智・・・化け物である。

深層心理のレベルでの思考まで読みとられたらしく、彼女の笑顔がより明るくなる。

当然のように額の血管は本数を増してゐるけど・・・。

「な、な、なんでもないです・・・」

声は震え、無意識のうちに涙が溢れ、膝が笑い出す・・・外から見れば俺の顔は真つ青になつてゐるだろう。

なんでこんなに怖がっているか・・・それは正直言つて俺自身にもわからない。

いうなれば、俺の生存本能といえる部分が何かを感じていた。

俺の失われた記憶の向こうで、何かがあつたのだろうか？

そう思つた俺は、その頃の冬司くんに同情を向けていた。

「着いたよ、冬司」

「『』、『』めんなさい…」

「？？」

俺の過剰とも言える反応に、沙智が不思議そうな顔を向けていた。

「・・・・・あれ？」

「どうしたの？そんなに疲れちゃった？」

心底心配そうな表情をしてくれる沙智に、少しだけ申し訳ない気持ちを抱きながら、ぎこちない笑みを顔に貼り付けた。

「ああ、大丈夫だつて。ちょっと考え」としてた・・・・・んで、どした？」

「そう・・・・・ん、着いたよ、目的地に」

「目的地つて・・・・・じ？」「

「うん、そり」

「でも・・・・・」

俺は言ひよどんだ。

ぼんやりと歩いていたせいか、自分でも気づかなければ、あと一歩というところまで来ていた。

周りはほとんど夜と化している

ここからでは見えないが、もう少し進んで頂上に立つてみれば、遠くの山々に沈もうとしている夕日が見れるだろ。たしかに、その光景は美しいかもしれない。

だが、それだけだ。

想像を超えた美しさと、うわけではないだろうし、自分はそんなものに心震わせるような人間ではない・・・と思つ。だから・・・彼女が、どういう意図でここまで連れてきたのか分からなかつた。

戸惑いを浮かべている俺に気づいたらしく、沙智の顔がいたずらめいたものになる。

「ほらほら、そんなにがっかりしないの。いつまでも来れば、すつごこれからさ」

そう言つたと同時に、俺の傍らから一気に頂上まで駆け上がつた。

小さい彼女から生まれた影が、俺の方まで背伸びしてくる。輝いている後ろ姿を見ながら、「やれやれ」とため息をつくと、最後の力を振り絞って彼女の後を追つた。

動けなかつた。

その場に縛り付けられた。

感動つてもんが・・・生まれ変わつて初めて分かつた気がするんだ。

街で見ている夕日とは違つて、山の頂上から見下ろす紅の太陽はとても輝いて見えた。

そう、茜色よりも少し強い、でも人の心を落ち着かせる色。夜の訪れを告げる藍と、昼の残り火の紅が混ざり、進み行く刻が紫に輝く。

長い飛行機雲が川のせせらぎにも見えた。

「大自然の美しさ」なんていうありきたりな言葉には、興味なんて無かつたのに・・・何故だらう、すゞく・・・すゞく懐かしい。

声もなく立ちつくしていた俺の頬に、穏やかな微笑みを浮かべた沙智の指が、そっと触れた。

その時初めて、自らの頬を伝つ熱い水滴に気づく。

「あ・・・・・れ・・・・・？」

心がぶつこわれちまつたかのように、自分の意志とは関係なく溢れてゆく涙に戸惑う。

「どうし・・・・・て・・・・だ?」

「・・・・やつぱり、心は覚えてるんだね」

「え?」

涙を拭うことも忘れ、彼女の方を向ぐ。

彼女の優しい微笑みも、涙で染まつてゐる。

そう、それは・・・・優しい涙。

「この場所はね・・・・冬司が教えてくれたんだ」

「俺…………が？」

「うん…………私が落ち込んだとき、いつもここに連れてきてくれた。受験で悩んだときも、友達と喧嘩したときも、自分に自信をなくしたときも…………。うん、あのときの冬司はさ、口べただつたでしょ？だから、暖かい言葉とか、そんなもの、全然言ひことができなかつたんだ。だけど、その分、態度で示してくれた。ここに連れてきてくれて、ただ黙つて私の話を聞いてくれて…………その間中ずっと手を握つてくれてた。それだけで……それだけでとても暖かかつたんだ」

その言葉を聞いて、少し…………いや、かなり落ち込んだ。体が震えた。

その震えが伝わったかのような小さくか細い声で、目の前の彼女に對して尋ねる。

「だから…………俺のこと…………好きになつたの？」

「うん」

いつの間にか座り込んでいた、彼女の横顔。その顔には穏やかな優しさと…………懐かしいものを想つときの表情が浮かんでいた。

…………苦しく…………なる。

「…………め…………ん。俺…………冬司くんを…………とつちまつて…………お前から、冬司くんを…………うばつちまつ…………」  
「…………」  
頭が働かない。自分が何言つてるのか、何を言つたいのかさえ分からなかつた。

俺は、彼女から恋人を奪つた。

物静かで、口べたで…………でも、優しい、本当に優しい青年を・  
・・・うばつちまつた。

俺のせい…………俺が生まれたせい…………

「…………冬司？」

驚いた顔をした沙智から、目を背ける。

そう・・・逃げるよ。」

卷之三

!

視線を逸らし続ける俺の頬を、彼女の両手が包んだ。

強引に自分の方に顔を向ける。

奪われてなんか無いよ!!!!冬司は・・・・冬馬は、何も変

「……」

「……………たけど俺！！」

「そんなことない！！！！！！たしかに、昔の記憶とかな  
くなつちゃつたし、性格も全然変わつちゃつたよ。だけど、変わつ  
てないよ。笑顔も、照れ屋なところも・・・・・優しいところも・  
・・・・・なにも、変わつてなんかいないよ」

俺は友人の言葉を思い出していた。

# 見舞いに来た友人達。

彼らはみんな、俺の顔を見て驚いた。

お前 変わったなあ

田舎くわん

卷之三

そんな言葉に愛想笑いを浮かべながら、俺は心中で叫んでいた。

どんなに変わつても、俺は俺だつて、そ

だけど、言えなかつたんだ。

どうかんせりも、俺は俺で、昔の……あの頃の冬語じぢ

た  
し

自分に相手にやがて力

俺の顔に、彼女の顔が近づく。

まるでキスするかのように、

「誰が何言つても、関係ない。私は、冬月の恋人だよ? — 番近く

で、冬司のこと見てたんだよ？だから、誰よりも冬司のこと知ってる。誰よりも冬司のこと想つてる。だからさ……だから、私を信じて。他人も、自分も信じられなくなつたときは、私を見てよ。私の中にある、冬司を信じて……よ

涙が浮かんでいた。

彼女の心の中から流れ落ちるかのよつこ、後から、後から、涙があふれしてきた。

こいつでも泣くんだ……なんて思つよりも早く、俺の体は動いていた。

・・・・・気がつくと、彼女の体は俺の胸の中にあった。

驚いた顔の彼女。

だけど、それはすぐに笑顔に変わる。

安心しきつた、子猫の顔。

俺の胸に、顔を埋める。

その行為が暖かくて・・・・・とても愛しくて・・・・・俺の心が震えてゆく。

「・・・・・やつぱ、前の俺も今の俺も同じだな・・・・・

女の好みが、おもいつきりかぶつてるわ。

小さな苦笑を、怪訝そうに見上げている沙智。

「ああ、なんでもない。・・・・・・・・・

「え？ なにが？？」

「記憶がないことが。・・・・・前の俺つてさ、お前とどれくらい付き合つてたわけ？」

「えつと・・・・・一年半・・・・・かな？」

それがどうしたの？と田で訴える沙智に、もう一度苦笑を返す。

「ああ、こんないい女と一年半もの思い出があるなんて、冬司くんにちよつと嫉妬するつていうか・・・・・わ。自分の記憶の中になんて、もつたいないなつて」

俺の言葉に、彼女の顔がみるみるうちに紅く染まってゆく。

どうやら、「いい女」という言われ慣れてない言葉が、彼女を照

れさせたらしい。

どっちの冬司も、普段いわね~からなあ・・・。  
おかしくなつて笑いをかみ殺していた俺の顔を、沙智がにらんだ。  
やばいっ・・・って思ったときには、俺の唇が暖かいものに襲  
われていた。

とたんに真っ赤になる俺の顔。

同じように真っ赤のままの沙智が、表情を隠すよひよひに深く  
俺の胸に顔を埋める。

「大丈夫だよ。思い出がなくたって、全然大丈夫だよ。だって、  
今、私と一緒にいるつてことが、冬司の思い出になってるんだから。  
・・・今、この時間を過ぎ」すことが・・・思い出を生きてるつ  
てことになるんだから」「

震える声が、胸に直に触れる。

胸を越えて、心の中に入つてくる。

いつもなら「くさいセリフ」って笑い出してしまつ俺も、このと  
きだけは笑えなかつた。

そのとおりだな、なんて・・・・らしくないことを思つてい  
たから。

夕日が山の向こう側に消え、天空で星達が瞬きだす。

目を細めながら、俺はその新しい思い出を、胸に焼き付けた。

その後、一ヶ月ぶりに、土産を買って帰つた。  
彼女と、俺と・・・そして、一ヶ月前の冬司くんのために。



(後書き)

昔かいた短編です。

十年近く前に書いたけど、いまとあまり変わってない・・・ってか、成長がないのか??( . . . )

気に入つて頂けたらとてもうれしいであります、隊長!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5076i/>

---

想い出を生きよう

2010年10月28日06時39分発行